The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大島本源氏物語の本文 : 書入れ・ミセケチ一覧（一）
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1988, 4, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67258
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大島本源氏物語の本文

―書入れ・ミセケチ一覧（一）―

伊井　春樹

大島本と呼ばれる源氏物語が、定家本をかなり忠実に継承した伝本として高く評価され、『源氏物語大成』の底本に用いられて以来、これが唯一の翻刻文でもあることから、青表紙本の標準的な本文として広く利用されてきた。しかし、それには翻字の誤りがあり、その後の注釈書で一部は訂正されてはいるが、同じ誤りを継承してもいる。そのことは、「大島本源氏物語の本文―『源氏物語大成』底本の問題点―」（「詞林」第三号、昭和六十三年五月）に述べた通りである。また、大島本の全冊にわたって行間に書入れられた注記の性格、本文の補入、訂正等の問題についても、すでに明らかにしている（「大島本源氏物語書き入れ注記の性格」「国語と国文学」昭和六十三年八月号）。本稿はその一連の内容で、ここでは大島本の書入れ・ミセケチについてまとめることにする。

以下に示すように、大島本には本文に関する書入れ・ミセケチがかなり多く認められる。朱筆と墨筆によってなされており、本文の書写の折に飛鳥井雅康によってなされもしたはずであるし、明らかに大内氏や吉見氏によって所持された当時の筆もある。本文の余白に注記を転写する作業と平行して、他の本文を参照しながら補訂してもいったのであろう。大半は、単純な書写のミスを訂正するが、中には青表紙本の本文でありながら、ことさら異文を書き込んでいる場合もあるし、その逆の例もある。大成本では、そのような個々の事情を無視して、すべて書入れられたり、ミセケチにされた、後の本文を青表紙本の底本として採用する。そのため大島本が、青表紙本諸本の中で孤立する現象も起こっているのだが、だからといって訂正前の本文を尊重すべきとも判断できず、このあたり処理が困難である。そのようなこともあって、大島本の書入れ・ミセケチを一覧にし、もとの本文の姿を明らかにすることにした。大成本では、校異でかなり詳細に指摘するが、それでも落ちてしまったのも多い。なお、朱筆・墨筆がどのような意味を持つのかまだわからないので、煩雑にもなるので、ここでは省略した。全体的なもとの本文の意義は、別に考察することにする。

桐壺

1 思ひあかり給ひつ（へ）る（五8）
「ひつ」をミセケチにして「へ」を補入し、「給へる」とする。「へ」を「つ」と読み誤ったのであろう。以下、初めにも述べたように、傍線はミセケチ、（ ）は傍書した語句を示す。

2 いとはしたなきことおほかれとかたしけなき事おほかれ御心はへの（五11）
「事おほかれ」をミセケチ。目移りによって、直前の「ことおほかれ」を再度書写したことによると思われる。

3 やかてまいらせ（さふせはせ）たまひなと（六10）
「まいらせ」をミセケチにして「さふらはせ」と傍書。「やかてさふらはせたまひなと」の本文とする。

4 いとよはく（う）なれは（八5）

5 事にいてゝ（も）きこえやらす（八10）
「いてゝ」の後に「も」とを補入する。以下、たんなる（ ）はその箇所に語句の補入を示す。

6 又いらせ給ひては（八14）
「は」をミセケチ。「給ひては」と「は」を持つ本文は、青表紙本のうち肖柏本・三条西家本がある。

7 さらにもえゆるさせ給はす（八14）
「も」をミセケチ。「も」を持つ本文は、青表紙本の横山本がある。

8 いとかく思たまへましまかは（と）（九3）
「まとかは」の後に「と」を補入。大島本と一致するのは、青表紙本の肖柏本がある。

9 くるしけなれはにたゆけなれは（九5）
「なれは」をミセケチ、「くるしけに」と読ませる。

10 かくなから（と）もかくもならむを（九5）
「かくなから」の後に「と」を補入、「ともかくもならむを」とする。

11 まかてさせたまふ（つ）（九7）
「たまふ」の後に「つ」を補入する。「まかてさせたまふつ」とする本文には、青表紙本の肖柏本・三条西家本、河内本、別本がある。

12 （さは）思ひつかしと（一〇7）

13 くらひ（を）送り給ふよし（一〇8）
「くらひ」の後に「を」を補入する。これについては、『源氏物語大成』の校異に指摘がない。

14 勅使きたりて（一〇9）
「たり」をミセケチにし、「勅使きて」と読ませる。

15 さまかたち（なと）の（一〇11）
「かたち」の後に「なと」を補入。もとの「さまかたちの」は、別本陽明文庫本と一致する。

16 のちのわさなと（に）も（一一1）

「わさなと」の後に「に」を補入、「わさなとにも」とする。もとの「わさなとも」の本文は、河内本・別本（陽・国・麦）と一致する。

17 御かた〳〵の（御）殿ゐ（一一2）

「殿ゐ」の頭に「御」を補入。「殿ゐ」は、別本（麦）と一致する。

18 わか宮の御こひしさをのみ（一一6）

「を」をミセケチにする。もとの大島本とは、河内本（為）が一致する。

19 暴風にいとゝあれたる心ちして（一二1）

他本では「野わき」とある語句だが、大島本では「暴風」と表記する。これで「のわき」と読ませたのであろう。

20 きみもとみに（ゑ）物ものたまはす（一二2）

「物も」の頭に「え」を補入。青表紙本の横山本でも、これと同じく「え」を補入する。

21 けに（え）たふましくないたまふ（一二4）

「たふましく」の頭に「え」を補入。

22 いとゝ心くるしう御（心）きもゝ（一二5）

23 けにこそいとしのひかたく（う）侍けれと（一二6）

24 さむへき方（なくたへかたきは）はいかにすへきわさにかとも（一二8）

補入して「は」が二度続くのは、衍字か。

25 夕あさゆふにならひて（一五13）

26 やまと詞言の葉をも（一六7）

27 花とりのいろにも音にもよそ（ふ）へきかたそなき（一五11）

28 あそひをそし給ふ（ナル）（一五14）

「ナル」はカタカナによる補入。

29 いかに（て）住らむ浅茅生の宿（一八4）

30 はゝからせ給ふはすこの御ことに（一八13）

31 たうりをもうしなはせ給ふ（ひ）（一八13）

32 女御も御心をちゐ給ぬ（一九6）

33 うちゑまれぬへきさまの（し）たまへれは（二〇1）

34 なす（ら）ひ給へきたにそなかりける（二〇2）

35 そのころこまうとのまいれる（なか）に（二〇6）

36 こうろくわんにつかはす（し）たり（二〇8）

37 弁もいとさえ（え）かしこきはかせにて（二〇13）

38 けふ明日かへり（さり）なんとするに（二〇14）

39 「かへりなん」の本文は、河内本・別本に共通する。ことひろこりてもら（さ）せたまはねと（二一4）

40 いとあたらしきけれとみこと成たまひなは（二一11）

41 うたかひををひ給ぬへく物し給へは（二一11）

42 けむしになしたてまつりて（る）へく（二一12）

43 ささいの宮の姫君みやこそ（二二6）

44 いとようおほえてをいり出てさせ給へり（二二7）

45 おなしつら（に）思ひきこえん（二二12）

46 まいらすせたてまつり給へり（二二14）
47 人の御きはまさりてそおほえたまへる（二三2）
48 うけはりてあかぬ事もなし（二三3）
49 おほしなくさむやうなるにも（二三5）
50 心（さしを）なしとみえたてまつる（二四1）
「心」の後に「さしを」を補入。なお、「さしを」の後に「イ」と記し、それを削っている。
51 たちいてゝ（ものし）と（おほしたり世にたくひなしと）みたてまつり（二四2）
後者の補入文の後に「イ」と記し、それを削っている。
52 御ひゝきにおとら（さ）せ給はす（二四8）
「さ」の書入れは朱による。「おとらせ」の本文は、別本の御物本と一致する。
53 きよらをつくしてつかうまつ（れ）り（二四10）
54 宮す（御やすみ）ところにまかて給て（二五2）
55 こ（の）きみにたてまつらんの御心なりけり（二五7）
56 人々おほみきなとまいる程に（二五10）
57 たかすへてまたまはり給ふ（二六4）
58 女きみはすこ（ク）したまへる程に（二六11）
朱で「こ」をミセケチにし、「ク」の後に「イ」と記すが、これは削っている。
59 この君さへこ（か）くをはしそひぬれは（二六13）
60 心つかひとつにかゝりて（二七8）
61 うちすみのみこのましうおほえ給（て）（二七11）
「給」の後に「て」を補入するが、大成本ではこの補入についての指摘がない。
62 おほい殿に二三日なとたえ〳〵（に）まかて給へと（二七11）
63 とゝのへを（す）くりてさふらはせ給ふ（二七13）
64 本のしけいしや（を）御さうしにて（二八1）

帚木

1 内にのみさふらひよら（う）し給て（三五6）
2 御むすこ（の）君たち（三五12）
3 おほされんこそゆる（か）しけれ（三六10）
4 それかかれかなとゝ（と）ふなかに（三七2）
5 まことかと（見もてゆくにみをとりせぬやうはなくなん）あるへきと（三八2）
6 われは（は）かほにて（三八13）
7 左のむまのかみ藤式部のせう（三九1）
「せう」の「せ」に「そ」と傍書。大成本では、「藤式部のそう」と、傍書の方を採用する。ミセケチにしているわけではないので、原本を尊重すべきではないだろうか。
8 さるへきすちならぬ（は）世人のおもへることも（三九3）

9 家のうちにたえ（ら）ぬことなと（三九11）
10 かみかかみは（は）うちをき侍ぬ（四〇5）
11 わかいもうと（と）ものよろしきゝこえ（四〇13）
12 君はおほすへ（し）ししろき御そとも（四一1）
13 ものまめやかにしつる（か）なる心の（四四2）
14 みすくしたらん中こと（そ）契ふかく（四五11）
15 その物とあともさ（た）まらぬは（四七1）
16 契りふかくともたえて又（見し）かきりと（四九12）
17 おとなひんにそへて（も）また（五〇2）
「そへて」の本文は、青表紙本の松浦本・池田本・三条西本と、さらに別本の陽明文庫本と一致する。
18 りむしのまつりのてう（うか）くに（五一3）
19 のとかにおもひなから（ら）はなん（五一5）
20 うちより日まかて侍に（五三10）
21 おもひしほれ（て）（こゝろほそかりけれはおさなきものなとも）ありしに（五六11）
22 わつらはしけにおもひまと（つ）はすけしき（五七11）
23 み木丁へたゝ（てゝ）おはしまして（六三10）
24 女とをきたつ（ひ）ねはものおそろしき心ち（六四8）
25 ひまもなけれ（は）（六五9）
26 しはしきゝ給よけむともえうけ給はらすとかしこまりてさふらふはしつかたのおましにに（六五9）
27 いつれかいつれなら（とゝ）ひ給に
28 いとおよすけの給ふ（ふ）いにかくて（六七1）
29 いまは（も）むかしもさたまりたる事（六七2）
30 うへなるきぬをしやるま（ま）てもとめつる人と（六八12）
31 おそはるゝ心ちしてやとおもひゆれと（六八14）
32 かほにもくゆりけり（かゝる）心ちするに（六九11）
33 きこえ（こえ）んかたなし（六九12）
34 あせになりていとなやましけなる（り）
35 あはれし（る）はかり（七〇3）
36 の給つく（く）すへかめれと（七〇3）
37 いとかやうなるきはは（は）きはとこそ（七〇6）
38 いとかたくしさしはへてはいかてか（七一13）
39 心つきなしとおもひあなつ（つ）る（七二7）
40 みなみのかうら（うら）むにしはし（七二11）
41 人〳〵のそくへかめる（り）（七二12）
42 あそむのおとゝ（う）とやもたる（七三12）
43 なまめきたるさま（ま）して（七四3）
44 あはてそころもへにける（ぬる）夜なけれはと（七四10）
45 やみなむとおもひはてたる（り）（七七13）
46 身は（も）いとはつかしくこそなりぬれと（七八1）
47 その原の（みちにあやなくまとひぬるかなきこえん）かたこそなけれ（七八4）

空蟬

1 御せうそこ（も）たえてなし（八五8）
2 た（い）めんすへくたはかれと（八五14）
3 はたちみそよそなとかさふるさま（八八1）
4 をのつからそはめも（にイ）みゆ（八八3）
「も」の傍らに「にイ」とするが、大成本の校異では指摘がない。「そはめにみゆ」の本文は、大半の青表紙本がそうであるし、別本の麦生本・阿里莫本・桃園文庫本とも一致する。
5 ひさしうみたまふ（は）まほしきに（八八12）
6 はら（は）へもそなたに入りて（八九13）
7 なをえ（た）ふましくなむとうれふ（九三6）

夕顔

1 そてのにほひも（所）せきまてかほりみちたるに（一〇四2）
2 おとこはゐ中にさ（ま）かりてめなんわかく（一〇五2）
大成本では「ま」をミセケチにして「ま」を傍書したと校異で指摘するが、明かに他の用例で見ても「さ」である。
3 しひらたつものかう（こ）とはかりひきかけて（一〇六12）
4 なのめならぬかたわ（な）へかりけると（一〇八8）
5 いとものをあま（ま）りなるまて（一〇九10）
6 ことさらめきたるさしぬき（の）すそ（一一〇11）
7 さらにえおもひみ（え）侍らす（一一一7）
大成本では、ミセケチにした「おもひえ侍らす」の本文を採用するものの、そのことには触れていない。
8 かくれさ（ま）かりありく（一一二8）
9 たゆま（ま）すあされありけは（一一四10）
10 さてすくしてんとおほされすと（一一五1）
11 ふとそむきかへ（く）るへきこゝろ（一一五12）
12 にはにされたるくれ（竹）せむさいの（一一七3）
13 いかて（か）にわかならんと（一一七12）
14 人くましきかくれかもとめたるなる（り）（一二〇3）
15 みところなくみな秋のゝ（ら）にて（一二〇8）
底本はもと「秋の野にて」の本文、これは青表紙本の横山本・榊原本・池田本と一致する。
16 けうそ（と）くもなりにける所かな（一二〇11）
17 つと御かたはらに（に）そひて（一二一14）
18 人は（え）きゝつけてまいらぬに（一二三2）
19 あつかりかさこ（う）しのかたにいぬなり（一二四1）
20 女おもかけにみえてふときこえうせぬ（一二四14）
21 から（う）して鳥のこゑはるかにきこゆるに（一二六13）
22 あま（さ）りものせよといひつるはと（一二七12）

23 あ（む）まにてものせむとの給ふを（一三二11）
24 いさ二条（院）へとのたまへと（一三四4）
25 か（わ）のみつにてをあらひて（一三五7）
26 われもよにえあるましきなめ（り）（一三六8）
27 なか〳〵（いみ）しくなまめかしくて（一三七6）
28 またうちかつ（へ）しつらうおほゆる（一三八6）
29 たま（また）ことの葉にかゝるいのちよ（一四二3）
30 しのひてとの給つ（へ）れと（一四二12）
31 少将のなきかほ（かほ）におりにみすれは（一四二14）
32 を（も）むくらむんとおもほしやりつゝ（一四四3）
33 右近は（は）たかしかましくいひさはかんを（一四四13）
34 ゆくゑなくてすき（ゆく）君は（一四五1）
35 あま（ま）りものいひさかなき（一四六5）

若紫

1 わらはやみにわ（つ）らひ給て（一五一1）
2 しゝこらう（か）しつる時は（一五一4）
3 とくこそ心みさせたまはめときこゆ（こゆ）れは（一五一5）
4 御らんせさせ（て）侍らは（一五三3）
5 よろつにまきゝ（ら）はしきこゆ（一五三5）
6 こと所ににすゆほひる（か）なる所に（一五三7）
7 申給はれりけるつる（か）さなれと（一五三10）
8 そこえ（ら）はるかにいかめしうしめて（一五四2）
9 そこのみるめもものむつかしうなと（一五五5）
10 たゝならす（す）おほしたり（一五五6）
11 たいとこ御もの（の）けなとくははれるさまに（一五五8）
12 いたうかす（み）たるにまきれて（一五五12）
13 十はかりやあらむ（と）みえて（一五六5）
14 たちてゆくかみの（ゆ）るゝかに（一五六14）
15 わらはやみにわ（つ）らひ侍るを（一五九6）
16 かゝり火ともしとこ（う）ろなともまいりたり（一六〇2）
17 うち（つ）けなる御夢かたりにそ侍るなる（一六〇10）
18 さかしゝ（ら）心なくうちかたらひて（一六一10）
19 はしたなし（く）やなとのたまへは（一六二4）
20 たきのよとみもまさりておとたかうきこゆ（一六二11）
「も」をミセケチにするが、大成本では指摘なし。
21 すこしねふたけなる（と）経の（一六二12）
もとの底本と同じく「経の」とする本文は、青表紙本の池田本・三条西本と一致する。
22 する（す）ろなる人も所からものあはれなり（一六二12）
23 おほえ（なき）心ちすへかめれと（一六三3）
24 あやしい（ひ）かみゝにやとたとるを（一六三4）
25 うけ給はりわく（く）へき人も（一六三10）
26 さるやうありてきこゆるな（ら）んと（一六三12）

27 いかてきい給へるこそ（と）そと（一六三14）
28 思たまへぬへき（御）事な（からもきこしめしひかめたる事な）とや侍らんと（一六五3）
29 と経しつゝ（る）ほうしのふせとも（一六七8）
30 あさましくをくら（さ）せ給へること丶（一六八5）
31 なに事に（も）めうつるましかりける（一六八11）
32 すいしむさうのふえ（え）もたせたる（一六八12）
33 けに丶（く）からすかきならして（一六九1）
34 めてたき人かなとみた（ま）ひて（一六九7）
35 宮の御ありさまよりもまさり給へるかなら（な）と（一六九7）
36 ひ　ひしりのたうと（と）かりける事なと（一六九11）
37 山みちのものかたりをもきこえむは（い）ふかひありて（一七〇10）
38 世には心もとけ（け）す（一七〇11）
39 うとくはつかしきものにおほし（て）（一七〇11）
40 しりめかり（に）みをこせ給へるまみ（一七一1）
41 まれまれはあさましの（御）事や（一七一2）
42 とさまかうさまに心みきこゆるるを（ほ）と（一七一4）
底本のもとの本文「きこゆるをと」は、青表紙本の横山本と一致する。
43 と（か）う世をおほしみたることおほかり（一七一7）
44 身をもはな（れ）す山桜（一七二3）
45 いとゝうしろめたかう（と）あり（一七二9）
46 いつくにも丶（〳〵）まうて給はす（一七三11）
47 いかなるにかと御（心）うこかせ給へかめる（一七四12）
48 御つかひなとの（ひ）まなきも（一七五11）
49 きゝ給ひて（もしさるやうもやとおほしあはせたまふ）にいとゝしく（一七五11）
50 さらにたい（は）かるへきかたなし（一七六5）
51 しら（く）れめいてうちそゝく（一七七2）
52 みなみのひさしひくつくろひて（一七七11）
53 うけたまは丶（ら）さりける（一七八1）
54 いみしう心へそき（け）にみたまへをくなん（一七八1）
55 なにかあさう思ひ給へとも（む）事ゆへ（一七八9）
56 かなしひ思ひ給ふ（る）なと（一八〇7）
57 こみや（す）所にをくれたてまつり（一八〇8）
58 いたつらに宮のおはするかとて（一八二4）
59 よりおはしたる御こゑいとらら（う）たし（一八二5）
60 おほしはなつへうももあらす（一八二5）
61 いとうつくしうおもひやらる（る）（一八二11）
大島本のもとの本文「おもひやらる」と、青表紙本の御物本・横山本・榊原本・池田本・三条西本、河内本の高松宮本・尾州本・鳳来寺本とが一致する。
62 うしろめたなうわりなしとおもひ（へ）と（一八三7）
63 この御四十九日すくしてや（なと）思ふ給ふる（一八四6）

64 さう〳〵しの（うおも）ひおもはす（一八六4）
65 よる（ひる）こひきこえたまふに（一八六4）
66 いはけなくうちいてき（こ）えさせ給ふなゝ（な）と（一八七4）
67 あやしう（おほしの給はするもいかなる御こゝろにか）おもひける（一八七8）
68 思はむなと（いひてこの人も事ありかほにや思はむなと）あいなけれは（一八七11）
69 えまいりこぬ（ヲ）をろかにやなとあり（一八八5）
もとの本文の「えまいりこぬ」は、青表紙本の横山本と一致する。
70 さふらふ人〳〵もおもひ（み）たれて（一八八5）
71 あつまをすかゝ（か）きて（一八八8）
72 ぬすみいてたりともときおもひなむ（一八八12）
73 車のそうそく（さ）なからすいしんひとりふたり（一八八12）
74 なに事も（に）か侍らむ（一八九11）
75 さ（る）へきにおはしまさはともかうも（一九〇9）
76 侍る（り）なむをいと思ひやりなきほとの（一九〇9）
77 そは心なゝ（な）り（一九一2）
78 さすかにゆゝしそ（け）れはねむしゐたり（一九一6）
79 いかにする事な（ら）むとふるはれ給へと（一九一10）
80 お（ほ）ろけにはあらしとさゝめく（一九二4）
81 ことさらにまいれて（と）ありけれは（一九二7）
82 いとうつくしきかり（に）われもうちゐまれて（一九二13）
83 （いと）わかけれとおいさきみえて（一九三14）
84 こあまきみのにそわ（に）たりける（一九四1）
85 たかひぬるはお（く）ちをしうおほしけり（一九四13）
86 さかしう（ら）心あり（一九五7）

末摘花

1 （うちに）さふらふわかむとほりの（二〇二1）
2 いかてか（は）御らむしつけむときこゆれは（二〇四14）
青表紙本の横山本・三条西本ともに「は」を補入する。
3 ひきわかれ給ひけるを（二〇五8）
4 おほつかなく心なましき（に）（二〇七11）
5 人わきし（し）けると思ふに（二〇八4）
6 えにしもやとつきなけにこそ（二〇八14）
大成本の校異では「えにもやと大」と「し」を落とす。
7 わりなきにて（を）えさしいて給はぬとなむ（二〇九10）
大島本では「を」を補入するが、大成本には指摘がない。
8 かの御ゆるしなう（く）ともたはかれかし（二一〇1）
9 さう〳〵しきよひゐなとにはかなきついてに（二一〇4）
もとの本文「よひゐなとに」は、青表紙本の横山本・池田

本・肖柏本・三条西家本と一致する。

10 いまめきたるけをつけはや（と）そ（二一一7）

11 おと丶こはいとつきせぬ御さまを（二一二12）

12 君かし丶さ（ま）にまけぬらん（二一三9）

13 なか〳〵くれ（ち）ふたかるわさかな（二一三14）

14 き丶ふせりけれとしりかほならしと（て）（二一四12）

15 かるらかならぬ人の御ほと（を）（二一五1）

「御ほと」は、別本の陽明文庫本と一致する。

16 さらはもろと（も）にとて（二一五6）

17 ぬすまはれ給へ（れ）（二一七3）

18 かのわたりにはいとをほつかなく（て）（二一七4）

19 さすかにうちみや（ら）れ給ふ（二二一1）

20 さむしと思へるけしきふかう（て）（二二三4）

21 ふるきのかはならぬ（きぬ）あやわたなと（二二三14）

22 心はせ（の）なたらかに（二二四6）

23 はしたなうはえ（え）かへし侍らす（二二五6）

24 いと（うれしき心さしにこそはと）の給ひて（二二五8）

25 （なを）あるやうあらむとおもひあはする（二二六4）

26 御ひとりゑみは（と）とかめあへり（二二七1）

27 さこむの命婦やひこのうねゑ（へ）やましらひつらむ（二二七3）

28 人のたてまつれる御そひとく（たり）（二二七8）

もとの「ひとく」は「一具」、この本文と青表紙本の横山本・池田本・肖柏本・三条西家本、それに河内本、別本の陽明文庫本とが一致する。

29 けはひうちそよめき（よ）ついたり君も（二二八4）

30 御ひんくきのしとけなきをつくろひ給ふ（二二八12）

31 さへつるはるはとかし（らイ）うしてわな丶かしいてたり（二二九4）

32 はくろめもさ（ま）たしかりけるを（二二九10）

33 心からなと（か）かううき世を（二二九11）

34 いかにの給はむ（と）すらむと（二三〇7）

紅葉賀

1 見給ひ（ひ）しのはれすやありけむ（二三八9）

2 まことの（み）山をろしときこえて（二三九8）

3 人むかへ給へ（ふ）なりと人のきこえけれは（二四〇9）

4 その事のあかぬに（と）おほゆるきすもなし（二四〇13）

5 おさなき人はみついたまふ（ま丶に）（二四一3）

6 いたく（く）しなとしたまへは（二四一14）

7 さるへ（き）事なとはおほす（せ）事も侍らむこそ（二四二14）

8 けふは（こと）いみしてな丶ひたまひそ（二四四4）

9 やむ事（なくおほしさためたる事にこそはとこ丶ろ）のみ

をかれて（二四五4）

10 （くはしく）そうし侍らむと（二四七8）

青表紙本の横山本・榊原本・陽明本・池田本・肖柏本・三条西家本、別本の御物本は、いずれも「くはしく」を持たない。大島本の補入は河内本との校合によるか。

11 さか（り）ぬへきひまにやありけむ（二五〇8）

12 いとくるしうこそさ（あ）れと（二五二6）

青表紙本の横山本・榊原本・陽明本・池田本・肖柏本・三条西家本、別本の御物本が、もとの底本の「されと」と一致する。河内本は「こそはあれされときみはまた」とある。

13 人の心やふらしと思てむつはしけれは（二五二7）

「むつはしけれは」は、大成本の校異に用いた青表紙本はすべて「むつかしけれは」とある。ただ、大島本には「は」の傍らに「かイ」とし、「むつかしけれは」の異文も存在する旨を述べるが、大成本では指摘がない。

13 なさけなからぬほとにうちは（い）らへて（二五四3）

14 わかもたせまへるにさしかへて（二五五3）

15 こたかきもりのかたえ（を）ぬりかへ（く）したり（二五五4）

「ぬりかへしたり」は、青表紙本の横山本・榊原本・陽明本、河内本の七毫本・尾州本・平瀬本、別本の御物本と一致する。

16 わつらはしいてなむよ（く）ものふるまいは（二五八4）

「く」は補入だが、大成本では指摘がない。

17 うちとけてものいひ（朱傍書「思ひイ」）さはけるけはひ（二五八14）

「いひ」の傍らに「思ひイ」と朱書するが、大成本には指摘がない。「もの思ひさはける」の本文は、校異に用いた他の青表紙本、河内本、別本の御物本と一致する。

18 まことはうつくし心かとよ（二五九5）

19 かたみにおほ（ほゝ）えまる（二六一1）

20 （さ）てそのゝちともすれは（二六一4）

21 され（と）うるさくてなむ（二六二 ヒ）

22 まいり給夜の御とん（も）に（二六二9）

花宴

1 いとめやすくもうく（て）しつめて（二六九7）

2 かゝるかたにやむこ（こ）となき人おほく（二六九9）

3 さらにもいはすとゝ（と）のへさせ給へり（二六九13）

4 この君をひかりにしたまつ（へ）れは（二七〇8）

5 いかてをろかにおほされれん（二七〇9）

6 にくみ給らむもあやしうしう（二七〇10）

7 ふちつほわたりをは（わ）りなふしのひて（二七一3）

8 ほそとのにたちより給つ（へ）れは（二七一4）

9 や|を（を）らのほりてのそき給（二七一7）
10 こなたさまに（は）くるものか（二七一9）
11 やかてきこえ（な）はたつねても（二七三12）
12 くまなきよ（しきよ）これみつをつけて（二七三12）
13 かくれたちて侍へ（つ）る車とも（二七三14）
14 めなれ（たる事なれ）とゆへなつかしう（二七四8）
15 れいのいとくちおし|くう（う）おほせと（二七五3）
16 ものゝねともと|ゝ（と）のほりて（二七五8）
17 れいともなりぬへく見たま|つ（へ）しに（二七五13）
18 ましてさめ|（か）ゆくはるにたちいて（二七六5）
「め」をミセケチにして「か」とするが、大成本には指摘がない。
19 か|ゝ（か）つらはむも人わるく（二七六5）
20 うちにう|く（て）御たいめんのついてに（二七六10）
21 うへにうこ|（そう）し給ふしたり（二七六14）
22 女みこたちなともおい|ひ（い）つる所（二七七1）
23 まよは（ま）しやはといふこゑ（二七八12）

葵

1 きさきは|し（ら）の女三の宮（二八五5）
2 たちわつらふ（よき）女房車おほくて（二八六8）
3 いつかた（に）もわかき物とも（二八六13）
4 さはかり|て（にて）はさないはせそ（二八七2）
5 心はせの（いと）はつかしく（二八九13）
6 思ひくたすへかめ|に（る）もやすからす（二九二11）
7 ある|しましきことなともさまたけきこえ（二九二13）
8 きこ|ゆ（え）かゝつらひ給へは（二九三2）
9 かやうに（待）きこえつゝあらむも（二九五6）
10 いとなたら|（た）しうひたすら世に（二九七1）
11 さすかに（いみしう）てうせられ（二九七14）
12 おとゝも宮もすこしし（り）そきあへり（二九八3）
大成本の校異に用いた青表紙本はすべて「しそき」とある。河内本も「しそき」なので、「り」の補入はそれ以外の系統本によるか。
13 いひい|へ（つ）ることもきゝにくゝ（二九九8）
14 御そきかへなとし給て心|え（み）たまへと（三〇〇12）
15 いまかう|（ら）いとさまことに（三〇一7）
大成本には、このミセケチの指摘なし。
16 いかてかはさ|（さ）のみは（三〇一10）
17 あやしきまてうちまも（ら）れ給（三〇二12）
18 あさ|（ま）りわかくもてなし給へは（三〇三1）
19 うれしきを|（せ）もましりて（三〇四4）
20 のこる事なくかつそこな（は）れ給事（三〇四6）
21 は|ゝ（か）なうすきゆけは（三〇六2）

22 きこえぬほとはおほしし（る）らむや（三〇七4）
23 ねんころにきこえつけさま（せ）給しかは（三〇八8）
24 見たてまつりあへる（つか）はむなと（三〇八8）
25 くんしゐあ（たか）りけり（三一〇14）
26 さるへ（き）かきりの人〳〵（三一二10）
27 あくかれ（は）てさせ給はむほと（三一三3）
28 あきとおる（り）たるなとに（三一五11）
29 一日ふつかも見（え）給はす（三一七8）
20 我（わか）君をみたてまつりて（三一七13）
31 わかれおしむほと（を）のかしゝ（三一八1）
32 さならぬおりたにある御けしき（三一八9）
33 うち（そ）はみては（わ）らひ給へは（三一九5）
34 たし（た）かの心つくしきこゆる人に（三一九6）
35 あしたにはわか君の御（も）ともに（三一九14）
36 ひるつかたに（わ）たり給て（三二一4）
37 おもひのほかに心（う）くこそおはしけれ（三二一7）
38 御さら（ら）ともなといつのまに（三二三6）
39 いかにおもひつらむとさら（さ）めきあへり（三二三10）
大成本には、「ら」をミセケチにし「さ」を傍書する指摘なし。
40 かはかりみしか（か）らめ（三二四7）
41 さう〳〵しけれ（く）はへなけれ（三二六1

賢木

1 まことにうして（と）おほす事こそ（三三三4）
2 御すみかに（はた）あらねは（三三三13）
3 女かたも（いと）心あはたゝしけれと（三三四3）
底本では「いと」を補入するが、大成本での指摘はない。河内本の高松宮家本・尾州家本が「いと心あはたゝしきに」であり、別本の為相本・国冬本も「いと」を持つ。
4 みすいら（し）むこと〳〵しきすかた（三三四8）
5 ほにはさまかはりて見ゆ（傍記「おもほゆ」）（三三五1）
「見ゆ」の傍らに「おもほゆ」と記すが、大成本では指摘がない。なお、別本の為相本・国冬本が「おほゆ」の異文を持つ。
6 ひたきやかす（か）にひかりて（三三五1）
7 あきらめ侍し哉（かな）と（三三五8）
大成本では、校異で「哉」をミセケチにして「かな」とすと指摘するが、傍書されているにすぎない。
8 わか〳〵しう（いて）ゐんかいまさらに（三三六8）
9 にはのたたすさ（ま）ひもけにえんなるかたに（三三七3）
10 おもほしのう（こ）すことなき（三三七4）
11 あやまちもしつへく（く）めてきこゆ（三三七14）
12 か（か）ならす心かゝる（三三九11）

13 せきのあなたよりそ御かへり（返し）ある（三四〇14）
14 ひとたひにも（と）おほしめしけれと（三四二5）
別本の国冬本が「ひとたひにも」の本文を持つ。
15 （なに）心もなくうれしとおほし（三四二7）
16 （藤の御そにやつれ給へる）につけても（三四三8）
17 おほした（た）るゝ事はあれと（三四三8）
18 かゝるへきこと（と）はおほししかと（三四六2）
19 かものいつきにはそ（む）わうのゐたまふ（三四七5）
20 （夜）ふかきあかつき月夜の（三四九1）
21 （猶このにくき御心のやまぬに）ともすれは（三四九9）
22 春宮の御ため（に）かならす（三四九12）
「御ため」は、河内本と別本の御物本・国冬本と一致する。
23 ぬりこめにをしいれら（れ）ておはす（三五〇7）
24 いとおしう（なと）うちさゝめき（三五一1）
25 おほえ給つ（へ）るかなとみ給まゝに（三五一10）
26 はつ（かしけなる）さまなとも（三五一11）
27 ある（り）ときこしめされむも（三五三1）
28 むくつけきまておほしいれる（り）（三五三3）
29 うちたへ（え）て内春宮にもまいり給はす（三五三10）
30 こもる（り）おはして（三五三10）
31 この女君のいとらうたけ（に）て（三五三13）
32 かみはそれよりもみしかくも（て）（三五五8）
33 つね（に）かきかはし給へは（三五七9）
34 人は（わ）るきまておほえ給へは（三五九14）
35 内の御方にまいり給つ（へ）れは（三六〇13）
36 いますこしなる（ま）めかしきけそひて（三六〇14）
37 とかめさせ（給）はさりける（三六一4）
38 とか（は）せ給て（三六一5）
39 思給へられ侍りてとそこ（う）し給（三六一12）
40 身つ（か）らのおもておこしになむ（三六二1）
41 白虹（虹）日をつらぬけり（三六二6）
42 ころもへにけり（と）きこえ給へり（三六三11）
43 あなかちにしのひかき給つ（へ）らむ（三六三12）
大成本の校異に用いた青表紙本諸本、それに河内本・別本（為相本・国冬本）はいずれも「かき給つらむ」とする。
44 なへてならぬをえりいてつゝ（つ）（三六三14）
45 十二月十よひ（日）はかり（三六四14）
46 たまのちくらのへこし（うし）ちすのかさり（三六五1）
47 御よういなとなをにる（もの）なし（三六五9）
48 御くし（おろし）給程に（三六五14）
49 （なと）かさしもと（三六六7）
50 いとたへかたうお（ほ）さるれと（と）（三六六10）
51 にしのたいのみなみのにあたりて（三六八12）
52 かむ（たち）めなと道をよきつゝ（三六九2）
53 かくも（む）をもあそひをも（三七二2）
54 いかてかこ（う）しもたらひ給ひけん（三七三1）

55 かうやうなるおりのまほ（な）らぬ事（三七四6）
56 しぬへ|く（く）おほさる（三七七3）
57 いはせ給|らぬをたに（三七七12）

花散里

1 うちわたりにては|（は）（かなう）（三八七6）
2 よくなることをあつまに（をイ）しらへて（三八七12）

大成本の花散里の底本は定家筆本によっており、大島本は校異として採用するため、この「あつまを」とする傍書は指摘がない。河内本はかなり本文を異にするが、「あつまを」とある。

3 かつらの木（の）をひかせに（三八七14）
4 いかなる|に（に）つけても（三八八11）
5 女（御）の御けはひねひにたれと（三八九4）
6 よにしたかふものなれは（はかなきイ）むかしかたりも（三八九13）

「ものなれは」の後に補入の符号を付して「はかなきイ」と傍書するが、大成本には指摘がない。河内本は「はかなき」の一句を持つので、その本文によって校合したのであろう。

付記—本稿は、昭和六十三年度文部省科学研究費一般Cによる成果の一部である。なお、調査にあたっては古代学協会の御厚意に深謝申し上げる。